

第17回

第3章 現代を生きる人間の倫理

人間尊重の時代へ

今回学ぶこと

現代のさまざまな問題を考えるにあたり、その土台となる近代的な考え方の特徴について、「理性主義」や「人間中心主義」をキーワードに考える。その際、どのように「人間中心」、「人間尊重」の考え方が広まったのか、ルネサンスの特徴を理解しつつ考える。また、「人間の平等」という精神について、宗教改革の思想を通じて考える。



講師

小林和久

■ 古代から近代へ ■

現代は近代の延長にある時代だが、その特徴は、人間が自分の理性を頼りに生きる「理性主義」「合理主義」であり、人間は理性を至るところで発揮して、物質的に豊かな時代をつくってきた。この理性主義は、「人間中心主義」という考え方にもつながる。近代以前は、理性以外の権威、特に神を中心にして、人生や世界の問題を考えていたが、理性主義の考え方は16～17世紀のヨーロッパに生じて、そこから世界全体に広まっていった。

わたしたちは、現代の諸問題を解決して、よりよい生き方・あり方を考えるために、「理性の時代」・「人間中心主義の時代」である現代が、どのような考え方のもとに成立したのかについて、理解する必要がある。

■ 人間の尊重「ルネサンス」 ■

ヨーロッパでは14世紀ごろからルネサンスという文化の革新運動がおこる。ルネサンスとは、元来「再生」という意味で、具体的には古代ギリシャ・ローマの文化の再生を目指す運動だった。ここで「神中心から人間中心へ」という考え方の革新がおこり、当時のローマ・カトリック教会の権威によらず、自己の理性と感覚を頼りに、自由に世界を考えていこうとする気運が高まる。

ルネサンスの運動から、人間の主体性を尊重する精神が強まり、どんな分野でも自己の才能を無限に発揮する人間である「万能人」が理想とされた。その典型が、さまざま

な芸術作品で有名なレオナルド・ダ・ヴィンチである。また、人間の自由意志を強調するピコ・デラ・ミランドラや、『君主論』を書いて政治を道徳や宗教から切り離して考えるマキアヴェリなどが現れる。

■ ■ 平等への目覚め「宗教改革」 ■ ■

中世ヨーロッパの権威だったカトリック教会の墮落に抗議することから、宗教改革が起こった。この発端は、贖宥状（しよくゆうじょう めんざいふ 免罪符）の販売に対して、ルターが抗議したことだった。宗教改革で生まれた新しいキリスト教をプロテスタントと呼ぶが、これは「抗議する人」という意味である。

ルターは、自分の心で神を信じることを重んじ、聖書のみを信仰のよりどころとした。彼は、聖職者と普通の人との区別はなく、すべての人は神の前で平等だとも説いた（万人司祭説）。また、世俗の職業にも差別はなく、どんな職業でも天職として励むことが神の意志にかなうことであるとした。

さらにカルヴァンは、神の救済はあらかじめ神の意志で決定されているという予定説を徹底させ、救済の確信のために世俗の職業に禁欲的に精進することを強調し、営利活動も倫理的に肯定した。

◆ コラム ◆

ルターは「職業」を意味する言葉に Beruf（ベルーフ）というドイツ語を使いました。この言葉は、「呼ぶ」「召し出す」の名詞形で、英語では calling にあたります。なぜ、「呼ぶ」ことが「職業」になるのでしょうか？ ……「呼ぶ」とは神が呼ぶこと、つまり、「神がそれをするように人に与えた使命」という意味で、「職業」を指すようになるんです。現在は「キャリア学習」が大切とよく言われますが、働くことや職業の意味についても考えていきたいものです。